

ちゅうもん おお りょうりてん  
注文の多い料理店

ふたりひと わか しんし へいたい  
二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか  
ぴかする鉄砲をかついで、しろくま いぬ にひき やま  
奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、  
あるいておりました。

「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。とり けもの いっぴき い  
ん。なんでも構わないから、はや タンタアーンと、やって見たいも  
んだなあ。」

しか きいろ よこ ばら にさんばつ みま つう  
「鹿の黄色い横っ腹なんぞに、二三発お見舞うしたら、ずいぶん痛  
かい  
快だろねえ。くるくるまわって、それからどたつと倒れるだろ  
ねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ち  
よつとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いので、そのしろくま にひき  
いっしょにめまいを起して、しばらくうなつて、それから泡をふい  
て死んでしまいました。

「じつにぼくは、にせんよんひやくえん そんがい ひとり しんし いぬ  
のまぶたを、ちよつとかえしてみ言いました。

「ぼくはにせんはつひやくえん そんがい  
「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、  
あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、もひとりの

紳士の、顔つきを見ながら言いました。

「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし腹はすいてきたし、戻ろうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに、戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい。」

「兎もでてたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこう見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああこまったなあ、何かたべたいなあ。」

「食べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを言いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には

レ ス ト ラ ン  
RESTAURANT

せいようりょうりてん  
西洋料理店

ワイルド キャット ハ ウ ス  
WILD CAT HOUSE

やまねこけん  
山猫軒

という札<sup>ふだ</sup>がでていました。

「君<sup>きみ</sup>、ちょうどいい。ここはこれでなかなか<sup>ひら</sup>開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく<sup>なに</sup>何か<sup>しょくじ</sup>食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板<sup>かんばん</sup>にそう<sup>か</sup>書いてあるじゃないか」

「はいろいろじゃないか。ぼくはもう何か<sup>なに</sup>食べたくて<sup>た</sup>倒れ<sup>たお</sup>そうなんだ。」

<sup>ふたり</sup>二人は<sup>げんかん</sup>玄関に立ちました。玄関は<sup>しろ</sup>白い<sup>せと</sup>瀬戸の<sup>れんが</sup>煉瓦で<sup>く</sup>組んで、<sup>じつ</sup>実に<sup>りっぱ</sup>立派なもんです。

そしてガラスの<sup>ひら</sup>開き<sup>ど</sup>戸がたって、そこに<sup>きんもじ</sup>金文字で<sup>か</sup>こう書いてありました。

「どなたもどうかお入り<sup>はい</sup>ください。決して<sup>けつ</sup>ご<sup>えんりよ</sup>遠慮はありません」

<sup>ふたり</sup>二人はそこで、ひどくよろこんで<sup>い</sup>言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり<sup>よ</sup>世の中は<sup>なか</sup>うまくできてるねえ、<sup>きょうひいち</sup>今日一日<sup>にち</sup>なんぎしたけれど、こんどは<sup>い</sup>こんないいこともある。この<sup>うち</sup>は

りょうりてん  
料理店だけれどもただでごちそうするんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意  
味だ。」

ふたり と お けっ えんりょ はい ろうか  
二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になって  
いました。

そのガラス戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに太ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

ふたり だいかんげい おお  
二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ろうか すす い みず ぬ  
ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗り  
の扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろ  
う。」

「これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこ  
う書いてありました。

とうてん ちゅうもん おお りょうりてん しょうち  
「当店は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知くださ  
い」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「そりゃそうだ。見たまえ、東京の大きな料理店だって大通りに

はすくないだろう」

ふたり  
二人は言いながら、その扉<sup>と</sup>をあけました。するとその裏側<sup>うらがわ</sup>に、

ちゅうもん おお  
「注文<sup>ちゅうもん</sup>はずいぶん多い<sup>おお</sup>でしょうがどうかいちいちこらえてくださ  
い。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士<sup>しんし</sup>は顔<sup>かお</sup>をしかめました。

ちゅうもん おお したく てまど  
「うん、これはきつと注文<sup>ちゅうもん</sup>があまり多く<sup>おお</sup>くて支度<sup>したく</sup>が手間<sup>てまど</sup>取るけれども  
ごめんくださいとこういうことだ。」

はや へや なか  
「そうだろう。早く<sup>はや</sup>どこか部屋<sup>へや</sup>の中<sup>なか</sup>にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブル<sup>すわ</sup>に座<sup>すわ</sup>りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことには、また扉<sup>と</sup>が一つ<sup>ひと</sup>ありました。そ  
してそのわきに鏡<sup>かがみ</sup>がかかって、その下<sup>した</sup>には長い柄<sup>なが</sup>のついたブラシ<sup>え</sup>が  
お  
置いてあったのです。

と あか じ  
扉<sup>と</sup>には赤い字<sup>あか じ</sup>で、

きゃく かみ だろ  
「お客さま<sup>きゃく</sup>がた、ここで髪<sup>かみ</sup>をきちんと<sup>だろ</sup>して、それからはきもの泥<sup>だろ</sup>  
を落<sup>おと</sup>してください。」

か  
と書いて<sup>か</sup>ありました。

ぼく げんかん やま  
「これはどうももつともだ。僕<sup>ぼく</sup>もさつき玄関<sup>げんかん</sup>で、山<sup>やま</sup>のなかだとおも  
って見<sup>み</sup>くびったんだよ」

さほう きび えら ひと く  
「作法<sup>さほう</sup>の厳<sup>きび</sup>しいうちだ。きつとよほど偉<sup>えら</sup>い人<sup>ひと</sup>たちが、たびたび来<sup>く</sup>  
るんだ。」

ふたり かみ くつ だろ おと  
そこで二人<sup>ふたり</sup>は、きれいに髪<sup>かみ</sup>をけずって、靴<sup>くつ</sup>の泥<sup>だろ</sup>を落<sup>おと</sup>しました。

そしたら、どうです。

ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんでなくな  
って、風がどうっと部屋の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互によりそって、扉をがたんと開けて、次  
の部屋へ入って行きました。

早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう  
途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのです。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲とたまをここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが終始来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。  
た。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとりください。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来  
ているのは」

二人は帽子とオーバコートとを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたある  
いて扉の中にはいりました。

と<sup>うらがわ</sup>  
扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡<sup>めがね</sup>、財布<sup>さいふ</sup>、その他金物類<sup>たかなものるい</sup>、こと

と<sup>が</sup>尖ったものは、みなここに置いて<sup>お</sup>ください」

と<sup>か</sup>書いてありました。